

「食べることは生きること」

建築を学びハウスメーカーに勤めていた私がフードコーディネーターなど食に関わる仕事を志した理由が、実はもう一つあります。

私の父は2005年四月、五十二歳で他界しました。お酒が好きで、インスタント食品が好きで、愛煙家。少年のようなやんちゃさがあり、サッカーや陸上の練習に付き合ってくれたり、バンドを始めればライブを見に来てくれたりと、三姉妹の長女だった私をまるで「長男」のように可愛がってくれました。そんな父は私にとって「いいやつ」。同じ建築の仕事に携わってからは良き上司のような存在でもあり、故郷の米子市に帰ると、杯を交わしながら相談を持ち掛けたものです。

しかし、父は五十歳の時、突然倒れました。医師からは余命三カ月との宣告。末期がんでした。抗がん剤治療をやめて自宅療養していた父に請われ、インスタントのだしを使ってうどんを作ったことがあります。あれだけインスタント食品が好きだったのにほとんど

食べませんでした。

結局、宣告から二年間生きることができましたが、闘病の最終段階では食事が取れず、点滴でなんとか命をつなぎました。亡くなる数時間前、もうろうとしていた父が言ったのは「腹減ったな」。これが最期の言葉になりました。

食べることは生きること。

私は父の死を通じ、今も食べ物を口に運ぶとき、生物として当たり前の摂理を実感しながら生きています。だからこそ、「食べること」が楽しければ人生はもっと楽しい」と、より多くの人にお伝えできればと思っています。

ご愛読ありがとうございました。